

## 初學者の繪

大下 藤次郎

### 〔五〕 色彩

▲初學者の繪に多く見るは、色の涸濁せると色に遠近の區別の明ならぬ點である。

▲色が濁る爲めに、遠近も不明に、濃淡の調子も破れ、畫面は乾燥して少しの潤澤のないものとなる。

▲鮮かに輕かるべき木も重くなり、薄く透明なるべき葉も厚く、石は綿の如く、水は毛布の如くなるは、皆色の濁れるより來る結果である。

▲然らば如何にしてこれを救ふべきか、先第一に繪具を澤山持たぬとである、必要以外の繪具をパレットの上にコネ返して、強て色を造らんとして、各自彩料の特性を減して仕舞ふとを止めねばならぬ。

▲次は紙の上で繪具を混ぜぬやうにするのである、第一色の生乾きのうちに第二色を塗ると、下の色と混じて變色する。

▲其次はアマリ紙の上へ磨りつけぬとである、油繪筆を用ひる場合は特に注意すべきである。

▲夫から筆洗の水は常に清く、又其容器は大なる方がよい。

▲パレットを清潔にして置くとも必要條件である。

▲次に色の遠近を別つは、大切なとである、如何に形の上に大小遠近があつても、色に其區別が見えなくては、水彩畫は無趣味なものになる。

▲種々なる色彩ある山も、遠くなれば殆ど一色となる如く、自然物は皆夫々、遠ざかるに従つて、其色が不透明に、且單調になつてゆくものである。前景の樹は黄とブルシアンブルーで綠を作つたら、遠景には其をコバルトに代へるといふやうに、違いものは不透明に寒く、近いものは透明に暖かいといふ大體の描方を心得て研究すれば、追々此區別が明らかになつて來るであらう。